

シャガール作《アポリネール礼讃》の両性具有像について

樋上千寿

はじめに

1911年にパリ留学を果たしたシャガールは、1914年までの期間に《ゴルゴタ》(1912年)や《妊婦》(1913年)などキリスト教的テーマの作品をいくつか手がけている。パリ留学直前にも《聖家族》(1909年)、《割礼》(1910年)など、ユダヤ教徒のシャガールが異教徒としての立場から、それらのテーマに貫かれてきた教義や典礼に対して異議を呈するという性格の作品を制作している¹⁾。そのようなキリスト教的テーマ作品の中でひととき異彩を放つのが、1911年から12年にかけて制作された《アポリネール礼讃》である。本作は、1914年、ベルリンのヘルヴァルト・ヴァルデンの画廊「デア・シュトルム」において開催されたシャガールにとって初めての個展で披露された。作品のテーマは『創世記』の「人類創造」のエピソード、つまり「アダムとエヴァの創造」から、二人の「原罪」、そして「楽園追放」までの一連の物語である。縦横約2メートルにおよぶ作品を構成する主なモチーフは、下半身を共有したアダムとエヴァ、彼らの背景に大きく描かれた円盤、その盤面に描かれた数字、画面上部に描かれたシャガールの三種類の署名、そして画面左下の射抜かれたハートと、その周囲に書き込まれた友人たちの名前などである²⁾。

本稿では、本作の中心的なモチーフである両性具有像としてのアダムとエヴァについて論点を絞り、その聖書解釈学的な成果と図像的源泉とが、いかにしてシャガールのアダムとエヴァへと接続していったかについて考察したい。



1 《アポリネール礼讃》1911～12年



2 《アダムとエヴァ》1911～12年

《アポリネール礼讃》のアダムとエヴァ

《アポリネール礼讃》(図1)のアダムとエヴァは、下半身を共有した両性具有的人物像として描かれている。本作のための習作であるグワッシュ《アダムとエヴァ》(1911~12, 図2)でも、エデンの園の知恵の木を背にして立っているアダムとエヴァは、やはり下半身を共有する両性具有像として描かれている。さらに、《アポリネール礼讃》の習作として、もう一点のグワッシュ(図3)と、三点の素描が描かれている(図4~6)。グワッシュによる習作と素描との相違点は、グワッシュには背景に螺旋の円盤がなく、素描には《アポリネール礼讃》と類似の円盤が描かれていることである。



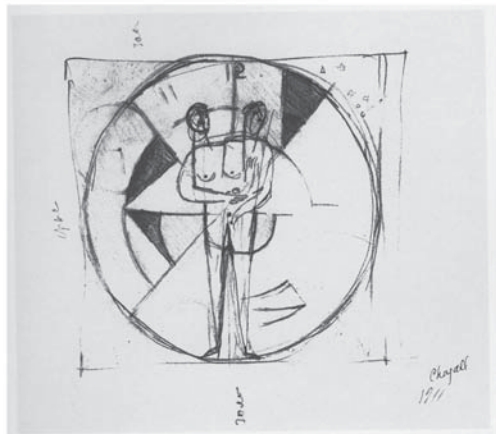
3 《アダムとエヴァ》制作年不明



4 《アポリネール礼讃》習作 1911年



5 《アポリネール礼讃》習作 1911年?



6 《アポリネール礼讃》習作 1911年

両性具有像の伝統

なぜ彼らは両性具有像として描かれたのか。両性具有像としてのアダムとエヴァというモチーフは、シャガールの独創によるものなのか。

両性具有像の伝統は古く、ヘレニズム世界においては原初の人間を両性具有者と考えた太母神信仰の例があり、またアレクサンドリアのフィロン（紀元前20年～紀元50年）も最初の人間を両性具有者として解釈している。またプラトーンの『饗宴』（紀元前385年頃）でアリストパネースが、「太古の人間に、かく男性、女性、両性と三種族いた」と述べている³⁾。ヘレニズム世界との接触があったヘブライズムにおいても、これらの影響が見られる。4～5世紀のアモライーム（賢者）によるミドラッシュの記述や、それらの解釈を継承したラシー（Rabbi Shlomo ben Isaac, 1040～1105年）の註解、さらにマイモニデス（Moses Maimonides, Moshe ben Maimon, 1138～1204年）やナハマニデス（Moshe ben Nahman, Moses Nahmanides, 1195～1270年）による聖書解釈においても、最初のアダムとエヴァを両性具有者として解釈している⁴⁾。

『創世記』1章27節、および2章21～22節解釈上の問題

では、なぜアダムとエヴァを両性具有者として解釈する必要があったのか。それは、よく知られているように『創世記』の人類創造に関する記述が、大きく二箇所に分けて記されており、しかもその記述が「矛盾している」からである。

まず、創世記1章27節で、こう述べられる。

神は人を（oto in x）ご自身のかたちとして創造された。神のかたちとして彼を創造し、男と女に彼らを（otam on x）創造された。（1-27）（新改訳、太字、括弧内、下線は筆者）

さらに、続く第2章21～22節では

神である主は深い眠りをその人に下されたので、彼は眠った。そして、彼のあばら骨の一つを取り、そのところの肉をふさがれた。神である主は人から取ったあばら骨をひとりの女に造り上げ、その女を人のところに連れて来られた。（2-21～22）（新改訳、下線は筆者）

と記述される。

『創世記』の冒頭部分は、二つの資料、つまり「祭司資料」（1章1節～2章3節）と「ヤハウエ資料」（2章4節～22節）とが縫合されて成立していると言われる⁵⁾。この矛盾あるいは不整合はこれらの資料の起源が異なることに起因していると考えられるが、この二箇所に分けて描かれた人類創造のプロセス記述の整合性をどのようにつけるか、という議論が聖書解釈者たちの間でなされた。そして、第1章は、いわば総論で、結論だけを述べたもの、そして第2章では、創造のプロセスを詳しく述べた、という解釈が一般的である。ただし、第1章で神が創造した人間について、単数形の（oto）「彼を」と複数形の（otam）「彼らを」が混在していることも解

釈者を混乱させた。ハイファ大学のヤッファ・エングラード Yaffa England は、その際にヘレニズム世界で受け容れられていた両性具有者という解釈が整合性をつけるために有効であると考えられたと述べる⁶⁾。

4～5世紀のアモライームは、次のような解釈をしている。まず、ラビ・イエレミヤ・ベン・エリエゼルは

「神がアダムを創造された時、神はアダムを両性具有者として創造された」(Midrash Beresith Rabbah 8:1)

と述べる。そしてラビ・シムエル・ベン・ナーマンは

「神がアダムを創造された時、神は二つの顔を持つ者として創られたのち、彼を二分割した」(Midrash Beresith Rabbah 8:1)

と述べる⁷⁾。

これらのミドラッシュを参照し、解釈したラシーは、

「神はアダムを最初の創造の際に二つの顔を持つものとして創り、その後二つに分割したというミドラッシュの伝統がある」(Mikraoth Gdoloth Beresith, 1:27)

と述べ、この解釈によるアダムとエヴァのイメージが、シュテートルのヘデル (ユダヤ人初等教室)において「トーラー」とともにラシーの註解を参照するユダヤ人のあいだでも馴染んでいったと考えられる。

視覚表現上の問題

このような両性具有のアダムとエヴァという概念的なイメージは、初期キリスト教においても共有されており、それを視覚表現においてどう描くかという問題がキリスト教の美術表現の場にて浮上することになる。

この問題に関して、ヤッファ・エングラードは、2章21～22節に出てくる *צלה* (*Tsela*) の訳語を巡って、いくつかの視覚表現のバリエーションが生まれたと述べている⁸⁾。*Tsela* は、「あばら骨」のほか、「側面 *side*」の意味もあり、聖書全体で約25箇所出てくるこの語の訳のほとんどは「側面」の意味だが、2章の21～22節についてのみ「あばら骨」の訳語が当てられてきた。ただし、*Tsela* には「側面」のほかに「わき腹」という意味もあるため、図像表現においてはひとつのタイプに絞り切れなかったと考えられる。その結果、大きく分けて以下の4つのタイプの表現が生み出されたという。

まず、*Tsela* を「あばら骨」と訳した場合、1) あばら骨そのものを取り出すもの (図7)、そして、2) あばら骨がエヴァに成長するもの (図8)、「側面」「わき腹」と訳した場合、3) アダ

ムの体側，または背中，あるいは背後からエヴァが出現するタイプ（図9, 10），そして，最初の人間を両性具有者として神が創造し，のちにそれを二つに分割した，という解釈から，4) 下半身を共有するアダムとエヴァ，というタイプが生まれる（図11, 12）。



7 アダムとエヴァの創造
Bible of San Paolo, Tours, 870年頃



8 エヴァの創造
Speculum Humanae Salvationis, Bohemia, 14世紀



9 エヴァの創造 Andrea Pisano, 1344～48年頃



10 エヴァの創造 バイユーの時禱書
1450～60年頃



11 エヴァの創造
Parc Abbey Bible, Belgium, 1148年



12 エヴァの創造 Bible, Mosan, 12世紀

まとめ

ミドラッシュ、そして、とりわけラシーの解釈による両性具有者の概念的なイメージが、シュテートルで生まれ育ったシャガールに影響を与えただけでなく、キリスト教図像伝統で生み出された視覚的なイメージもまた、シャガールのアダムとエヴァ像のイメージ形成に少なからぬ影響を与えた可能性は否定できない。1910年前後から14年までの最初のパリ留学時代に、シャガールがキリスト教図像伝統で親しまれてきたモチーフを独自の解釈で改変させたパロディ的な作品を多く描いていることを考慮すると、彼のキリスト教美術への強い関心と積極的なアプローチが、《アポリネール礼讃》の下半身を共有したアダムとエヴァ像の採用に結びついたのではないかと考えられる。



13 神の御母「偉大なパナギア」のイコン
12世紀初頭



14 シャガール《妊婦》1913年

註

- 1) ヘブライ大学名誉教授でシャガール研究者のズィーヴァ・アミシャイ＝マイゼルスによると、《妊婦》（図 14）は、ロシア・イコンの聖母子像（図 13）を元に描かれたとされるが、シャガールは聖母マリアの処女懐胎に疑義を唱えているという。《妊婦》の「女性像」は正面向きの女性の顔と右向きで顎鬚を生やした男性の顔が合体したいわば両性具有者として描かれている。シャガールは、もしマリアが処女のまま懐胎したのなら、彼女はこのように両性具有者でなければならない、と言おうとしている。さらに、イコンではマリアの胸元に描かれるメダイオンを腹部へと移動させ、胎児が孕まれるのは胸ではなく子宮である、と主張している。さらにシャガールは空を飛ぶ牛を描いているが、これはイディッシュ語の慣用表現「牛が屋根の上を飛んだ = di ku iz gefloygn ibern dakh. (די קו איז געפלוין איבערן דאך.)」つまり「有り得ない話だ」という彼の見解を暗喩しているという。Ziva Amishai-Maisels, “Chagall’s Jewish In-jokes,” *Journal of Jewish Art*, 5, 1978, p.87.
 関府寺司「イディッシュ・イディオム」関府寺司編『ああ、誰がシャガールを理解したでしょうか？』大阪大学出版会、2011年所収、36～37頁。
- 2) 両性具有像以外のこれらのモチーフ解釈については、拙稿「《アポリネール礼讃》」, 関府寺司編前掲書、61～67頁を参照されたい。
- 3) 「人間の性別は、三種族あって、現今のように男性女性の二種族ではなく、そのうえになお、両性をひとしくそなえた第三の種族がいた。(中略) 男女両性者^{アンドロギネス}というものが、一つの種族をなして、形の点でも、男女両性をひとしくそなえつつ、存在していた…(中略) 太古の人間に、かく男性、女性、両性と三種族いた」プラトーン『饗宴』, 森進一訳, 新潮文庫, 2013年, 44刷, 58～59頁。
- 4) תורת חיים, בראשית, עמי כט-לב, גא-גב. (The Torat Chaim, Bereshith 1., Jerusalem, 1993.)
 Rashi, The Torah: With Rashi’s Commentary, The Sapirstein Edition, translated, annotated and elucidated by Herczeg Yisrael Iseer Zvi, Vol.1 Bereishis/Genesis, Brooklyn, NY, 2012, pp.17-18,28-29.
- 5) 上山安敏『魔女とキリスト教 ヨーロッパ学再考』人文書院, 1993年, 340～342頁。
- 6) Yaffa Englard, “The Creation of Eve in Art and the Myth of Androgynous Adam,” *Ars Judaica* Vol.5, 2009, p.30.
- 7) Lieve Teugels, “The Creation of the Human in Rabbinic Interpretation,” in *The Creation of Man and Woman: Interpretation of Biblical Narratives in Jewish and Christian Traditions*, ed.Gerard P.Luttikhuisen (Leiden,2000), pp.108-109.
- 8) Yaffa Englard, op.cit. pp.32-36.

